

第2回SPH運営指導委員会議事録

1 日 時 平成30年10月5日（金）14:00～16:30

2 場 所 県立高鍋農業高等学校 家庭経営室

3 参加者 【運営指導委員】

中瀬委員長、土器委員、横山委員、槐島委員、木村委員、松木委員、
藤藪委員、川越委員

【高鍋農業高校】

萩原校長、岩切教頭、立野主幹教諭、村山教諭、横田教諭、平川教諭、
長澤教諭、石戸教諭、黒木教諭、弓削教諭、田住教諭、椿本教諭

【県教育委員会】

中別府主幹、谷口指導主事

4 協議内容（記録者：本校職員）

（1）SPH事業経過報告

①第28回全国産業教育フェア山口大会における発表用ポスターの説明（報告者：本校職員）

②SPH専用ホームページの紹介（報告者：本校職員）

③取組経過報告（報告者：本校職員）

- ・各研究の現在までの取組状況と、今後の取組予定について報告
- ・第2回SPH事業に関するアンケート結果について報告
- ・SPH事業における新商品について紹介

（2）事業経過についての委員の意見

【SPH事業における評価に関すること】

（委員長）アンケートに、自由記載欄はあるか。あればどのような意見が書かれていたか。

（本校職員）生徒向けアンケートには無いが、職員向けアンケートにはある。職員からは事業をより推進させるための提案が多かった。

（委員長）取組活動は色々とされているのでもしかしたらSPHの活動として認知されずに取り組まれている可能性があるのではないか。全体として職員の機運の高まりは感じるか。

（本校職員）アンケート実施の工夫を図り、その上で結果を分析していきたい。職員の機運について、さらに高めていけるようにビジョンを共有していきたい。

（委員）事業計画の中にある「目指す生徒像」があるがそこへの到達度はどのように測るのか。

（本校職員）今回示したアンケートとは別に、ルーブリック評価等を行う予定。

（委員）SPH事業に対する評価は、活動報告だけでは物足りない。数値など客観的な指標が必要ではないか。

（委員長）他の学校ではどのような評価を行っているか。

（本校職員）客観的な指標の一つとして、卒業生の進路実績、例えば就農率などの数値を用いたりしている。一方、生徒の資質・能力に関する評価も行われている。本校ではSPHと

は別に就農アンケートを取っており、就農への関心度を示すものとして、SPH前後の比較から評価できると考えている。評価手法を追求していくことも本事業の一つであり、研究を進めたい。

- (委員長) 事業のタイトルに“農業経営者及び関連産業技術者の育成”とあり、目指す生徒像に“郷土を愛し・・・”とある。SPH事業という視点から、みやぎきの発展を担う人材育成に向けた進路指導は為されているかという点はどうか。
- (本校職員) 本校は県内就職率が多い。今年の3年生の状況はどうか。
- (本校職員) 園芸科学科は、2年前に3年担任をしていた時よりも、就農や関連産業就職への希望者が増えていると感じる。
- (本校職員) 畜産科学科は、27名中22～23名が畜産関係の進路先を希望しており、みやぎきの畜産を担う人材育成ができています。
- (本校職員) SPH事業においてチーズ製造に関わっている生徒は、その学びを生かした進路先を希望している。効果が出ていると感じる。
- (本校職員) フードビジネス科では、食品系を進路先に希望する生徒が多い。一般的に食品系は県外希望が多いが本校は県内希望が多い。デュアルシステムにより、専門性を生かした進路選択を行う生徒が多くなったと感じる。
- (委員) 2年前から県単位で県内就職を促進する取組を始めており、状況として県内全体としても地元が目が向くようになっている。
- (本校職員) 全国で8校、九州で3校しか指定されていない貴重な事業だからこそ、成果がしっかりと見える報告書にしてもらいたい。何を成果とするか明確にすれば分かりやすくなる。
- (委員) 3年目の目標がどうで、今どの辺りにいるのか見えない。3年目の最終目標が見える報告書にすべき。例えば、最終目標を“GAP認証によって農産物の付加価値を向上させる”などのように示すなど。
- (委員) 昨年度は中間報告の際に3年間の工程が示されていた。報告書の中にその3年間の工程が示されればより分かりやすくなるのではないかと。
- (委員長) 3年終了時にどのような形で評価するのかをよく検討して欲しい。
- (委員) 資格取得も、評価の指標になるのではないかと。たとえば、食プロなどはどうか。
- (委員長) 資格取得についての考え方はどうか。
- (本校職員) 資格取得については学科の専門性を踏まえての上で、挑戦している。共通の資格として2年生全員が日本農業技術検定の試験に挑戦している。資格取得は、知識や技術の能力を客観的に評価するには大事な指標となる。また、アグリマイスター制度などの顕彰制度も、生徒の能力を測ることができると考え、積極的に取り組んでいる。
- (委員長) SPH2年目の中で、数値では見えない部分で生徒の変容を感じるころはあるか。
- (本校職員) 例えば、果樹研究班で取り組んでいる規格外の日向夏を使ったドライフルーツの商品開発では生徒から販売についてアイデアが出るなど、積極性や創造性を感じる。
- (委員長) アンケートは平均値であり、前向きに感じている生徒もいる。そういう集団をいかに評価として示すかという点についても課題にすると良いのではないかと。

【GAP・HACCPに関する取組について】

(委員) GAPに関する取組は全学科で行うのに対し、HACCPに関する学習は食品科学科だけで行われているのか。

(本校職員) HACCPは工場内での衛生管理を指導するもので、現在は食品科学科の生徒を主体に指導している。

【会社経営に関する取組について】

(委員) 会社経営は具体的にどのように取り組んでいるのか。

(本校職員) 農場における各部門（各専攻班）において、特別会計を企業会計に見立てた学習活動に向け計画を進めている。

(委員) 会社経営の取組のひとつであるICTについてもそれを活用するには費用がかかる。そのような費用の計上もあるのではないか。

(本校職員) 農場会計内の予算で運営できるか、検討が必要。

(委員) ICT活用については、スマート農業に向けた取組も面白いのではないか。

(委員) 会社設立に関する手続き等のことで、専門家の派遣など協力できる。

【新商品の開発に関する取組について】

(委員) 新商品の開発について相談を受けているが、生徒がより主体的に取り組めるような工夫が必要ではないか。生徒の活動が商品のストーリーになり、それがセールスポイントになる。

【デュアルシステムに関する取組について】

(委員) 事業所での実習をとおして、生徒が気づいた点等は是非会社に報告してもらいたい。会社が生徒を評価するばかりでなく、会社も外部からの意見等を聞けると経営改善に生かせる。